



## 没後10年 ナムジュン・パイク 展

# 2020年 笑っているのは誰? + ? = ??



X氏のハート /  
1976-82 /  
キャンバスに  
エナメル・ペイント /  
66×41.4cm

会期 : 前半 2016年 7月17日[日] - 10月10日[月・祝]

: 後半 2016年10月15日[土] - 2017年1月29日[日]

休館日 : 月曜日[7/18, 9/19, 10/10, 12/5・12・19・26, 1/9は開館], 10/11~10/14と12/31~1/3は休館

開館時間 : 11時より19時まで [毎週水曜日は21時まで延長]

入館料 : 大人 1000円 / 学生[25歳以下] 800円 ペア割引: 大人 2人 1600円 / 学生 2人 1200円 小・中学生 500円 / 70歳以上の方 700円  
※ 前半のチケットの提示で、後半のチケットが300円割引になります。 ※ 各割引の併用はできません。

主催 : ワタリウム美術館 / ブルーノ・タウト展実行委員会

助成 : 芸術文化振興基金

会場 : **ワタリウム美術館** 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-7-6 Tel.03-3402-3001 Fax.03-3405-7714  
official@watarium.co.jp <http://www.watarium.co.jp>

この度ワタリウム美術館では、「ビデオアートの父」として知られる20世紀最大の芸術家ナムジュン・パイクの没後10周年記念展を開催いたします。

ソウルの裕福な家庭に生まれたナムジュン・パイク (Nam June Paik、白南準 1932年7月20日 - 2006年1月29日) は、朝鮮戦争の勃発に伴い日本に逃れ、鎌倉へと移住しました。卒論『アーノルト・シェーンベルク研究』にて東京大学文学部美学美術史学科を1956年に卒業後、現代音楽を学ぶべく渡独、現地でカールハインツ・シュトックハウゼンやジョン・ケージらと出会い、禅をテーマとしたアヴァンギャルド作品を多数発表、1962年にはジョージ・マチューナスからの誘いで国際的な芸術運動フルクサスへと参加しました。



ロボットK-567とパイク 1993

1963年にヴッパータールで世界初のビデオアート作品を発表すると、テレビを使ったアートの可能性を探るべく、当時モノクロ1チャンネルの放送しかなかった西ドイツを離れ、カラーテレビ放送の始まっていた日本へと再来日、当時TBSに勤めていたエンジニアの阿部修也と共にビデオシンセサイザーの開発・研究を行います。さらに秋葉原で買い集めた部品から世界初のアートロボット『K-456』を阿部氏と共同製作し、それを携えてマチューナスとケージの待つニューヨークへと1964年に渡ると、そこで出会ったチェリストのシャルロット・モーマンと共に『ロボット・オペラ』(1964)など数多くのパフォーマンス作品を発表しました。

ブラウン管の走査線を強力なマグネットで歪めた『マグネットTV』(1965)、後のミュージックビデオに多大な影響を与えたビデオアート作品『グローバル・グルーヴ』(1973)、瞑想する仏陀がテレビを見ている『TV仏陀』(1974)、禅寺の石庭をテレビへと置き換えた『TVガーデン』(1974)など、テクノロジーと仏教的世界観を融合した作品を多数製作、さらに1974年には現在のインターネットの原型となる『エレクトロニック・スーパーハイウェイ』を構想します。1984年1月1日には、衛星技術を用いて世界中で同時発生するパフォーマンスを同時配信するサテライト・アート作品『グッド・モーニング、ミスター・オーウェル』を発表、最新技術を用いて世界を一つにつなぐことで、全体主義国家によって分割統治された近未来のディストピアを描いた小説『1984』(1949)の著者ジョージ・オーウェルへと返答しました。

今展示は、ワタリウム美術館コレクションより、パイクが最も活躍した70年代から90年代にかけてのインスタレーション、ビデオ、ペインティング、ドローイング等230点を通じて、芸術家パイクの全貌を明らかにする壮大な試みです。作品をより深く理解すべく、パイク自身の手による未発表原稿や、参禅先の永平寺にて製作したビデオアート作品、筑紫哲也氏による当時のTVインタビュー映像などを加え、ナムジュン・パイクの人間像や思想的背景が浮かび上がってくる構成としました。また1961年に会って以降、生涯を通じて『ユーラシア』と呼ばれる共同製作を行ったドイツ人アーティスト、ヨーゼフ・ボイスに関する作品群は、特別に一部屋の展示室を設けました。

(文責：渡辺真也)

今展示は前後半の二部、六つの部屋から構成されます。

## 前半：1956 – 1989

Room 1: 1956 – 78 フルクサスとの出会いからビデオアートの誕生まで

Room 2: 1980 – 83 VIDEAいろいろ

Room 3: 1984 – 88 サテライトTV ビデオアートの世界同時配信へ

## 後半：1990 – 2020

Room 4: 1990 – パイク地球論

Room 5: 1993 – ユーラシアのみちと永平寺

Room 6: 1961 – ヨーゼフ・ボイスとナムジュン・パイクのユーラシア

Room 7: 2016 – 2020年 笑っているのは誰？ + ？ = ？？

今展示タイトルは、パイクが1993年にワタリウム美術館カタログに寄稿した、2020年に笑っているのは誰かという大胆な予測にちなんでいます。さて、パイクが26年前に予想した、2020年に笑っている人物とは一体誰なのでしょう？

その答えは、展示の中に隠されています。

ケージの森/森の啓示 / 1993 /

植物、モニター 20台、映像3チャンネル、再生機3台、ステレオ1組 /  
554×465×800cm



フルクサスバス / 1978 /  
紙にクレヨン、サインペン /  
29×20.5cm



映像作品「グローバル・グループ」  
/ 1973



映像作品「ジョン・ケージに捧げる」 / 1973



P.S.

もし 2020年 中国のGNPが  
アメリカを抜いて 世界一になったら  
内戦がなければ人口が 5対1だから  
不可能ではないだろう。

その時、墓場でニタニタ笑っている人が一人いる筈…  
彼の名は？

P.S.

もし2020年に中国のGNPがアメリカを抜いて世界一になったとしよう。

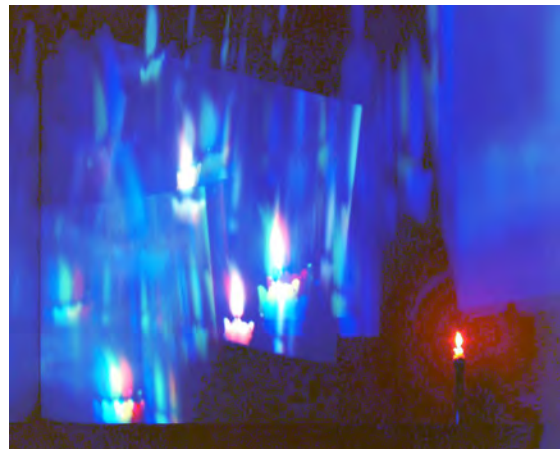
内戦がなければ人口が5対1だから不可能ではないだろう。

その時、墓場でニタニタ笑っている人が一人いる筈…彼の名は？

ナムジュン・パイク『フィードバック&フィードフォース』1993より



無題 / 1980 /  
紙にクレヨン / 65.5x55.5cm



ニュー・キャンドル / 1993 /  
ろうそく、ろうそく立て、カメラ1台、ビデオプロジェクター 4台 /  
500x310cm



ボイス / 1988 /  
コヨーテの剥製、帽子、そり、木片、モニター  
11台、TVキャビネット10台、映像1チャンネル、  
再生機1台 /  
150x270x70cm



ユーラシアのみち / 1993 /  
中央アジア製日用品、40W電球、金属、モニター 14台、映像  
3チャンネル、再生機3台 / 740x300x230cm